

稀 覯 書 を 教 室 へ

教養部教授 高坂史朗

先日、久しぶりに近畿大学の図書館に入り、うかつにも迷子になってしまった。閲覧室が大幅に拡充し、開架図書が充実し、雑誌室が移動し、閉架の積層書架まで配置が変わっていたからである。親しい図書館員に「延滞常習、貸し出しオーバーの札付きの人間がこのざまです」と告げると、「先生が来ないからいけない。雑誌室の移動はずいぶん前ですよ」と揶揄された。そういえば近年非常勤に出向している他の大学の図書館が整備され、目新しいので、しばらくはそちらの方へ通い詰めていた。

近畿大学の図書館は変わった。そしてこれは大学図書館の機能の変化の大きな流れに対応している。おそらくいくつかの大学図書館では「閉架書庫」という言葉が死語になっているだろう。図書館は「書籍」「典籍」という知識の宝物をしまっておく「蔵」ではなくなった。それは大量の出版物に購入が追いつかないばかりではなく、いくつかの役割をそれぞれの機関が分担して受け持ち、「隠さない」システムを確立すれば、それで適切に対応できるのである。そして、大学図書館は学生と教員の情報システムのセンターとなって行く。近畿大学中央図書館もその動きを加速しているのである。

*

今年度、私は授業の教授法を変えることを目指している。従来「人間論」「日本文化論」を担当していたがそれに「外国文化論」を加えた。そもそも教授法という言葉自体が教えを授けるという教師が権威をもって学生に知識伝達を行うありようを示す言葉である。「人間論」といった哲学的思考の科目の場合、



知識伝達よりも、深く考えると、論理的に思考すると、あるいは自己の思惟をいかに適切に表現するかといったことが中心になる。「日本文化論」の場合、人によっては日本文化についての知識を主眼に置く方もいらっしゃるが、私はそれよりも、日本の文化をどうとらえるか、他の国の文化によって相対化し、さらに主体的に担うということを目指している。さて、問題は今年度の「外国文化論」である。本年度のテーマを「中世ヨーロッパの世界」に設定しているが、多くの学生はヨーロッパ経験がない。経験の共有がないと勢い知っている者はその知識をひけらかすことになる。そういった知識のひけらかしほど、辟易するものはない。人間論にしても、日本文

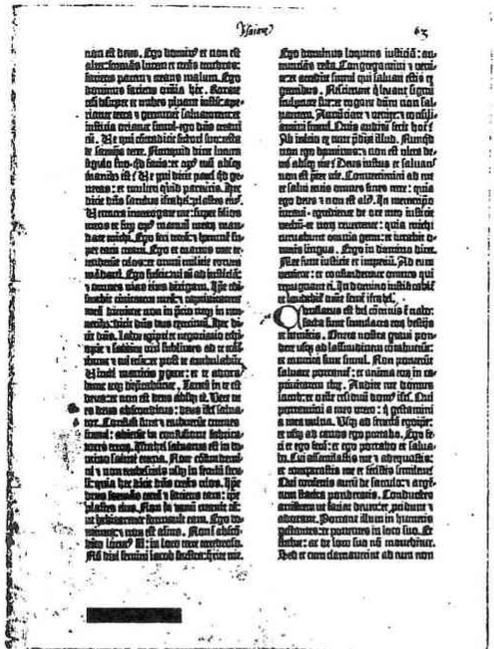
化論にしても「人間」である限り、「日本人」である限り、自己経験の共通性や、教師の独断の見解を相対化し得る機能をもつ。「外国文化論」にはその機能がない。知識の伝授はやむ得ないところがある。専門学部の教育の趣旨はそれでも良いが、教養部の教育目的はそういった辞書的知識の集積にはない。他の異なる文化に触れて、自己のありようを確認したり、相対化したり、ともかく、柔軟な思考のありようを模索するのである。基本になるのは学生主体なのである。教師はできるだけヨーロッパはこうなのだ、「学」にしないことが必要である。

幸い今年度マルチメディア教室（15-1）が整備され、使用許可を得られた。そこで中世ヨーロッパの情報をメディア機能を通して、ふんだんに提供している。もちろんその際、学生の受容の主体を構築することを目指しながらである。

*

先日、グーテンベルクの活字印刷がヨーロッパ社会にどう影響したかというテーマを取り上げた。そして、ふと中央図書館にグーテンベルクの『四十二行聖書』の一葉があることを思い出した。たぶん断られるだろうと、おそろおそろ中央図書館の貴重書庫から15-1の教室への移動の許可を申し出た。なんとあっさり許可してもらえた。図書館の方針が変わったのだ。図書館はその役割が変わってゆき、変えていかなければならない。稀覯本を貴重書庫に厳重な管理のもとに所蔵していることをひけらかすのではなく、学生の教育のために積極的に利用する方向を目指していかなければならない。それが近年の方針と図書館員から聞いた。

学生とともに「本物」を手にした。五百年以上の時間の隔たりと日本とヨーロッパという何千キロの空間の距離の中で、意外と鮮明に残る印刷、色鮮やかな顔料、羊皮紙のしっかりした紙質、古風なラテン語文字、一葉一葉おそらくグーテンベルクとその弟子とだけで刷り上げられていったであろう、その一葉。乏しいラテン語の知識で一文を読んでみる。「non est deus. Ego dominus et non est alter: formas lucem et creas tenebras:



館蔵「四十二行聖書（グーテンベルク聖書）」
マインツ 1455～56年

faciens pacem et creans malum. Ego dominus faciens omnia hec. わたしが主、ほかにはいない。光を造り、闇を創造し平和をもたらし、災いを創造する者。わたしが主、これらのことをするものである。」（イザヤ書45章6-7）

作る人の喜び、そしてこれを手にした当時の人々の感激。本物だけが与えてくれる無限の想像の世界を学生とともに味わった。